

説得のための弁論術

——プラトン『ゴルギアス』における弁論術の再考——

須 賀 麻 衣

1. 序言

規範にかかわる事柄を扱う際、言論（ロゴス）のはたらきはずねに不可避の問題である。プラトンの政治哲学において言論の問題は通常、対話と弁論術の対立によって論じられる。簡単に定義すれば、前者は真理への到達を目指す理性のみに依拠した言論のはたらきであり、後者は言葉の巧みさや雄弁さを目指す言論のはたらきであると言える。

このような対立を所与とすると、プラトンにおける対話の強調は、即座に弁論術の否定へとつながる。しかし、プラトンの諸対話篇に見られる弁論術に関する記述は、必ずしも対話の称揚と弁論術の否定に限定されるわけではない。本稿で考察の対象とする『ゴルギアス』では、弁論術は辛辣に批判される。そのような否定的見解がある一方で、弁論術に対して積極的な役割を付与している場面も見られる。プラトンは弁論術をつねに否定するのではない。2つの相反する態度が、弁論術に向けられているのである。したがって本稿の目的は、プラトンの政治哲学において、弁論術がある側面においては評価されていることを示し、それが有効とされる理由づけをすることである。

プラトンの政治哲学を論じるにあたり、弁論術を取り上げる必要があるのは、彼が生涯関心を持ち続けた事柄、すなわち「政治」をいかに行うかについての問題を軽視しないためである。プラトンにおいて「政治」が、ポリスの構成員であるところの市民たちの魂の秩序づけであるならば、言論にかかわる活動は、ソクラテスが行っていたような対話相手のみとの合意を目指す対話を越え、

自らの主張が多くの市民に受け入れられるよう語らなければならない。真理の探究を目指す哲学は、他者に規範を受け入れさせるという内的な拘束力を伴うときに、政治と接点をもつ¹。そしてこの接点は、他者に語るというまさにその点において、言論のはたらきと必然的に結びつく。プラトンが弁論術を批判するとき、それはつねにソフィストが用いていたような種類の弁論術のみを名指して論駁するというわけではない。弁論術の観点の導入によってプラトンの哲学は、個人的な規範に向けて語られるのみならず、「政治」の文脈において理解されるものとして成立しうるのである。

2. 『ゴルギアス』における弁論術

2.1. 古代ギリシア・アテナイにおける弁論術の役割

プラトンの初期対話篇に分類される『ゴルギアス』は弁論術を主要なテーマとしており、ソクラテスはそれを詳細に吟味する。弁論術が考察の対象として取り上げられたのは、紀元前5・4世紀の古代ギリシアのポリス、アテナイという固有の文脈のためであると考えられる。『ゴルギアス』で論じられる弁論術の内容に入る前に、まず、なぜ弁論術が政治で重要となるのか、その理由を歴史的文脈と関連づけながら素描しよう。

紀元前6世紀から5世紀にかけての、ソロンの改革、クレステネスの改革、ペリクレスらによる改革を経て、アテナイ・デモクラシーは制度的に完成する。民会では市民として認められた成年男子が平等に参加・発言・投票することができ、彼らは議論をし、意思表示できた。アテナイ・デ

モクラシーのもとで実際にすべての人が平等に参加していたわけではないが²、少なくとも制度上は、すべての市民が政治に参加することが可能であった。

市民（デーモス）に力（クラトス）が委ねられているデモクラシーは、言論にかかわる技術、すなわち弁論術 [rhētorikē: ῥητορική] が活発になるための背景として機能した。民会や陪審法廷では、もはや財産や身分が市民たちの身を守ってくれることはない。自らを守るために、何よりも必要とされたのは、民会や陪審法廷において決定を下す多くの他の市民を説得し、彼らを自らの味方につけようような「言論の能力」であった。このような時代状況にあって、民会や陪審法廷を支配しようとする人びと、すなわち弁論のすべを教えるソフィストや弁論家が姿を現す³。言葉の使い方と議論の仕方の習得は、デモクラシーの下で生きる市民にとっては重要な課題であり、ソフィストや弁論家が教授すると約束する、大衆を説得できる言論の能力、すなわち「弁論術」は、アテナイ市民にとって必要不可欠な技術となっていた。すべてを支配するものは市民であり、市民を支配するものは弁論であった⁴。

2.2. ゴルギアスの弁論術とそれへの批判

『ゴルギアス』は、以上のようなデモクラシーと弁論術が密接にかかわる状況を背景として描かれている。この対話篇は、そのタイトルになっている老齢の大弁論家ゴルギアスの弁論術に関する見解を、議論の端緒としている。あなたが心得ている技術は何なのか、あなたを何と呼べばよいのか、と尋ねるソクラテスに対してゴルギアスは、自らが心得ている技術は「弁論術」で、それゆえ自分はすぐれた「弁論家 [rhētōr: ῥήτωρ]」であり、「人間にかかわりのある事柄のなかで、最も重要で最も優れたもの」を対象とすると述べる (449A-451D⁵)。

では、それは一体何なのか。重ねて問うソクラテスにゴルギアスは、弁論術によって、「自分自身には自由をもたらすことができるとともに、〔中略〕他人を支配することができるようになる」のであり、それゆえ弁論術とは、「言論によって人びとを説得すること [to peithein ... tois logois: τὸ πείθειν ... τοῖς λόγοις]」であると説明する

(452D-E)。それはすなわち、「どんな集会においても、人びとを説得すること」(452E)を意味し、ついに、ゴルギアスとソクラテスの間で、弁論術とは「説得をつくり出すもの」、「聴衆の魂に説得をつくり出す」能力をもつ仕事であるという合意に至る (453A)。このような弁論術を身につけていれば、「大衆の前では」、すなわち「ものごとを知らない人たちの前で」、専門家よりも説得力をもつことができる (459A)。その証拠にゴルギアスは、治療を受けようとしぬ患者を、医者よりもうまく説得して治療を受けさせた話を示してみせる⁶。そしてこのゴルギアスの主張は、「事柄そのものについては、それがどうあるかを、弁論術は少しも知る必要はないのであって、ただ、ものごとを知らない人たちに対してだけ、知っている者よりも、もっと知っているのだと見えるようにする、何らかの説得の工夫」という弁論術の定義に帰着する (459B-C)。

対話の相手がボロスに代わると、弁論術について自らはどのように考えているか、ソクラテスはその内実を明かす。ソクラテスによればそれは技術などではなく、「ある種の喜びや快楽をつくり出すことについての経験」である (462C)。そしてより詳しく、次のように説明する。

それは、技術の名に値するような仕事ではないが、しかし、機を見るのに敏で、押しが強く、人びととの応待に生まれつきすごい腕前を見せるような魂の行う仕事なのです。そして、その仕事の眼目となっているものを、わたしとしては、迎合と呼んでいるのです。〔中略〕それは技術であると思われていますが、しかしわたしに言わせるなら、技術ではなくて、経験や熟練なのです。(463A-B)

こうした熟練や経験が「迎合 [kolakeia: κολακεία]」と呼ばれるのは、一方で最善ではなく、人びとに最も快いと思われるものを差し出し、他方で無知な人びとを欺くという点においてである。

こうしたソクラテスによる弁論術の批判は、技術（テクネー [technē / τέχνη]）の概念を基準とした批判である⁷。多くの研究がこのソクラテスの観点に従い、それによって弁論術は否定的に捉えられてきた⁸。端的に言えば、当時のソフィス

トや弁論家たちが標榜する弁論術は、ソクラテスの、あるいはプラトンの意味において「技術」ではない、というものである。

確かにポロスとの対話では、このような観点から弁論術は批判されるが、『ゴルギアス』の後半部では、ここで述べられているものとは異なる弁論術の形態があって、それはソクラテスが賞賛さえする言論の技術であるかのように描かれている。そうであるならば、「技術」の観点からのみ弁論術を判定するには限界があるだろう。弁論術に対してこのような相反する態度が向けられたのは、後述するように弁論術がもつ有効なはたらきゆえであると考えられるが、まず次節では、ソフィストラが用いる欺瞞的な弁論術とは別個のものとして、かつ、「弁論術」という名を与えられた方法として描かれている「真の弁論術」[hē alēthinē rhētorikē: ἡ ἀληθινὴ ῥητορικὴ] (517A) とはどのようなものとして特徴づけられているかを検討する。

2.3. 「真の弁論術」とは何か

『ゴルギアス』の後半部で、ソクラテスはカリクレスを対話の相手としながら、弁論術には2つの種類があることを指摘する。ソクラテスは、すでに「迎合の術」なるものは発見していると述べた上で、政治的な場で用いられる弁論術はどのようなものがあるだろうか、とカリクレスに尋ねる。

では、アテナイの民衆に向けられる弁論術はどうかかね。〔中略〕弁論家たちはいつも、最善のことを念頭において、自分たちの言論によって市民たちが最善の人間になるようにという、そのことを狙いながら、話をするのだと君には思われるかね。それとも、この人たちもまた、市民たちの機嫌をとることのほうへすっかり傾いてしまっていて、〔中略〕彼らを一層よい人間にするのか、あるいはより悪い人間にするのかという、その点については、少しも考慮を払わないものなのかね。(502E-503A)

ここから、弁論術には2つの種類があることが容易に認められる。そしてまたカリクレスも、弁論

術には2種類あることを認める⁹。

2種類の弁論術のうち、ひとつは迎合としての「恥ずべき大衆演説 [aischra dēmēgoria: αἰσχρὰ δημηγορία]」(503A)、すなわち、2.2. で見たような、ソクラテスの非難の対象となっていた弁論術である。ソフィストや弁論家によって用いられているのはほとんどがこの種類であるとソクラテスは見なしている。もうひとつの弁論術は、「市民たちの魂が最善のものとなるよう [beltistai esontai tōn politōn hai psychai: βέλτισται ἔσονται τῶν πολιτῶν αἱ ψυχαί]」に、「いつでも最善のことを語る」弁論術である(同)。ソクラテスは、このような性質をもった弁論術を用いた人が現実に存在すること、あるいは存在したことを認めるわけではないため、ここでは、現存する弁論術に積極的な側面を見出していたとは言えないが、その理念形態として、恥ずべき大衆演説としての弁論術とは異なるものがあるということを示していると考えられる。

では、「市民たちの魂が最善のもの」となることは、一体どのような状態を指しているのか。ソクラテスによれば、「最善の魂」となるのは、「ある種の規律と秩序をもつとき」である(504B)。魂が規律をもち秩序だっているとき、その魂は「法にかなった [nomimos: νόμιμος]」状態にある(504D)。こうして、「法に従う人 [nomimoi: νόμιμοι]」は「節度ある人 [kosmioi: κόσμιοι]」とも言い換えられ、「そういう状態にあることが正義の徳であり、また節制の徳なのだ」と言われるに至る(同)。そして、魂に規律と秩序をもたらし、それを最善のものとする弁論家は、「技術の心得のある善き弁論家 [ho technikos te kai agathos ó technikós te kai ágathós]」(同)である。以上の議論をまとめて、この弁論術をソクラテスは次のように特徴づける。

技術の心得のある善き弁論家は、人びとの魂にどんな内容のことを語りかけるにしても、いま言われたようなことを念頭におきながら、語りかけるのではないかね。〔中略〕すなわち、彼の同胞の市民たちの魂の中に、正義が生まれて、不正は取り払われるように、また節制がその中に生まれて、放埒は取り払われるように、そしてその他の徳が生まれ

て、悪徳は去って行くようにという、そのことにいつも心を向けながらである。(504D-E)

以上の説明を見る限り、ソクラテスは弁論術という方法それ自体を否定しているとは考えられない。この説明に加え、弁論術が政治を行うための技術と同一視されていた当時のアテナイの状況を考慮すれば、『ゴルギアス』を政治へのコミットの断念宣言の書と解釈するのは誤りであろう。それにもかかわらず、『ゴルギアス』における弁論術は否定的側面ばかりが強調され、積極的に捉えられてこなかった。それはなぜであろうか。そして、プラトンは「真の弁論術」を提示することで、弁論術のどのような働きゆえに、それを肯定的に捉えようとしたのか。

2.4. 『ゴルギアス』の弁論術をめぐる解釈

『ゴルギアス』における「真の弁論術」は何を意味しているのか。この問題は『ゴルギアス』における弁論術に対するプラトンの見解を捉える際に決定的に重要となる。先述のように、ソクラテスは明らかに「真の弁論術」を善きものとして描いている。特に、一対一で行われる対話においてというよりもむしろ、弁論家が多く市民たちに語りかけるといった場面において、それは重要な役割を演じる。しかしながら、プラトンが弁論術にどのような積極的役割を付与しているのか、という問題は、『パイドロス』を通じて浮上する程度であり¹⁰、弁論術の役割に関する研究は、長い研究の歴史から見れば比較的新しい議論であるように思われる。加来が指摘するように、これまで『ゴルギアス』は、プラトンが政治を断念して哲学の方向へ向かった、一種の転向声明として「プラトンの弁明 (Apoligia Platonis)」とみなされてきた¹¹。当時のアテナイにおいて政治の技術と同一視されていた弁論術は、政治の断念により、プラトンによって否定されるに至ったと考えられてきたのである。

『ゴルギアス』で弁論術は否定されているという見解は、おおそ2つの仕方でも説明できよう。ひとつは、知識の有無に基づく説明の仕方である。この仕方に分類できるであろう見解によれば、ソクラテスが語る「技術」の基準に従う限

り、「技術」のカテゴリーに弁論術は属さない。たとえ『ゴルギアス』において弁論術に対する肯定的見解が見出されるとしても¹²、それは説得の技術としての弁論術を肯定しているのではなく、あくまでも真の技術であるための条件である。そして、ここで言う真の技術とは、弁論術が「もぐりこんだ」先の技術、すなわち司法術（正義の技術）[dikaiosynē: δικαιοσύνη]であるから¹³、幾人かの論者によって「真の弁論術」として特徴づけられる肯定的な主張は、結局のところ、司法術から区別できない技術となり、その結果、司法術の地位を獲得することになるという¹⁴。

弁論術が司法術に回収されてしまい、弁論術そのものの地位が残されえない理由は、プラトンにおける知識と説得の不可分性に求められる。ソクラテスがゴルギアスを論駁する際に語ったように、ソクラテスの論法に従えば、医術に関する事柄の説得は、医術の知識をもつことによって行われるように、事柄に関する知識の所有とそれを説得する能力は分かつことができない。したがって弁論術を技術によって判断する際に用いられるべきは知識の有無の観点であり、「事柄そのものについては、それがどうあるかを、弁論術は少しも知る必要はない」(459B)と言われるような弁論術は、『ゴルギアス』においてはソクラテスによって完全に否定されていると考えられるのである。否定されないためには正義の知識が必要となるが、そのときにはもはやそれは「弁論術」とは呼ばれず、「司法術」あるいは「正義の技術」と呼ばれることになるだろう。

弁論術を否定する見解を説明するもうひとつは、個別の人間ではなく、大衆全体と関係をもちうるような弁論術を一括して、ソクラテス的な対話と対置する説明の仕方である¹⁵。この世の多くの人にはあなたに賛成しないと常識に訴えるポロスに向かってソクラテスは、自分是对話の相手一人だけに関心があるのであって、多くの人びとのことは気にかけていないと断言する¹⁶。ここから、ソクラテスはどのような状況においても一対一で行われる対話以外には関心をもっていないことが明らかであると見なされる。そしてソクラテスが自らを「真の意味での政治の技術に手をつけている者」、「本当の政治の仕事を行っている」者であると定義づけるとき (521D)、ここで言われてい

る「政治」は、当時慣習的に用いられていた「政治」とは全く無縁なものとなる。ソクラテスが実践していた対話、そしてポロスに向けて暴露された多数者への無関心は、ソクラテスの「一対一の対話的な言論[one-on-one dialectical discourse]」、あるいは「個人的な対話的言論[private dialectical discourse]」を、伝統的意味での「政治」的な言論ではないものとして特徴づける¹⁷。ソクラテスの対話は、一方で当時の政治的な言論、すなわち弁論術に対置され、他方で大衆と関わりをもつような言論のはたらきは完全に退けられる。このような言論のはたらきをめぐる対話と弁論術の間の対立は、哲学と政治の対立に変換されることで、『ゴルギアス』における政治の地位は大きく揺らぐことになる。

『ゴルギアス』におけるこうした弁論術の否定的な捉え方は、首肯できる部分はあるとしても、それによって「真の弁論術」を十分に解釈できるとは考え難い。次章で詳しく論じるが、弁論術が一般的にもつ特質としての「説得」という作用は、知識の所有から必然的に導き出されるわけではない。知識の所有とそれを説得する能力は、確かにプラトンの哲学において分つことはできないが、だからと言って、知識を備えた技術と説得を安易に結びつけることはできないはずである。また、ソクラテス的な対話に価値を見出すことで弁論術の可能性をプラトンが拒絶していたように捉えることも、プラトンの政治哲学の意図の不十分な理解につながる。

真の知を目指す哲学のみでは、政治的場面において力不足となることを、プラトンはソクラテスの死刑によって痛感していた。それは、ソクラテスの死が予言的に語られる『ゴルギアス』の対話の構成にも見て取れる。弁論術を批判するソクラテスは、弁論術が政治的場面において強力な武器となると強調するカリクレスを、さらには弁論術を称揚する側に立つ対話相手の誰をも、最後まで説得することができない¹⁸。このような構成に、ソクラテスが従事する哲学への限界を感じる一方で、抗いえない弁論術の力を認め、葛藤するプラトンを透かし見ることは可能であろう。プラトンは、ソフィストや弁論家を批判しながらも、アテナイにおいて最も実践的で政治的な役割を担う弁論術の正しい姿を探究していたのである。

まさにこの葛藤こそ、市民（たち）の魂に対する方法の点で、ソクラテスとプラトンを隔てる決定的相違と言える。ソクラテスは市民各々の魂の変革を、「私的交際」によって実現しようとし、それはソクラテスただ一人の言論の技術によってなされる「魂の向け換え」であった¹⁹。このようなソクラテスの実践は、まさに『ソクラテスの弁明』において明らかにされる、個々人の生の吟味を伴う魂への配慮である。しかしながら他方で、「プラトンはこの〔ソクラテスの：引用者〕目的に共鳴しつつもその手段、方法を拒否した」のであり、「プラトンは、『迎合的』政治活動への拒否と共に、『野獣の中に単身飛び込む』類のソクラテスの方法（『国家』496C-D）をも拒否」したのである²⁰。ソクラテス的な手段を拒否した上でプラトンが有用性を見出した方法こそ、当時の政治において否定しがたい重要性をもった弁論術であった。

3. 弁論術と対話の相違

先に指摘したように、知識を有することを技術の名に値する条件とみなし、真の弁論術と対話を同一視することには、いくつかの難点が含まれていると考えられる。なぜなら、弁論術には本来的に備わった特性があり、それは対話によって規定される範囲を越えたところに位置しているためである。確かに、プラトンの哲学では言論の方法において、対話が最高位に位置していることは否めない。それにもかかわらず、プラトンは弁論術に有効性を見ていたのであり、その有効性は対話の範囲を越え出た特性であった。それゆえに彼は弁論術を全否定するのではなく、両義的な態度をとるに至ったと考えられる。

本章では、対話と異なる、その範囲を越え出ると考えられる2つの特性を取り上げ、第1節では説得を、第2節では多数者に語ることを扱う。

3.1. 説得

3.1.1. 同意と説得

「同意 [homologeō: ὁμολογέω]」は、『ゴルギアス』において真理へと導かれるひとつの重要な条

件として描かれている。大人になってまで哲学している人間に対して激しい非難を浴びせるカリクレスに向かってソクラテスは、彼こそ対話の相手として望ましいと讃えながら、「もし君が、ぼくの魂の思いなすことについて、ぼくに同意をあたえてくれるなら [moi sy homologēsēis: μοι σὺ ὁμολογήσεις], そのことこそ真理であるということが、ぼくにはよくわかっている」と述べる(486E-487A)。対話を通じて同意をとりつけ、それによって真理への到達を目指すこのいとなみは、まさにプラトンが描く対話としての哲学である。プラトンの諸対話篇、特に初期の対話篇に見られるような、ソクラテスが対話相手の主張を吟味し、論駁する方法であるところのソクラテス的なエレンコス²¹においてもまた、「同意」はひとつの命題から次の命題へ移行するための必須要件として役割を果たしている。命題から命題へ、そしてそれを繰り返すエレンコスは、ソクラテスがアゴラで行っていた「対話」と見なすことができよう²²。

では、ゴルギアスとソクラテスの間で合意された弁論術のはたらきである「説得 [peithō: πειθω]」(453A)は、対話によって可能となるのだろうか。その答えは否、だろう。これは、「同意すること」と「説得されること」との間に決定的な差異があることに由来する。しかしながらソクラテスによる、あるいはプラトンの対話篇において示される説得はしばしば、ソクラテス的なエレンコス、あるいはその延長線上にある対話やディアレクティケーと同一視される。その場合、『ゴルギアス』においてソクラテスは説得を、エレンコス、そしてそれが必ず含む同意と同じものとして理解することになる²³。

ところが、「同意」と「説得」の性質をそれぞれ考察してみると、両者は互いに異なるものであることが明らかになる。同意とは、プラトンの対話篇の多くの箇所で見られるように、ひとつひとつの命題を別個に受け入れることである。ただし、各々の命題に同意したからと言って、それらの命題が連なって導く当為まで相手が受け入れるかという、それは必然ではない。たとえば、「あなたの病気の治療において手術は避けられない」、「手術は激しい痛みを伴う」、「あなたは病気の治療をしなければ死ぬことになる」という3つ

の命題の各々を受け入れて、聞き手がすべてに「そのとおりだ」と答えるとしよう。しかし、たとえ3つすべての命題に同意したとしても、たとえば苦痛を避けるという眼前の利益のために、手術を拒否することは十分あり得るだろう。命題から導出される、「あなたは痛みを伴う手術をするべきである」という当為を患者が受け入れる保証はどこにもないのである。

同意ではなく説得が本領を発揮するのは、諸命題から当為へのまさにこの転換点においてである。だからこそゴルギアスは、弁論術を用いて手術を拒む患者を説得することができたのである²⁴。つまり、一方で同意は、諸々の命題に対する個別的受け入れではあるが、命題から導出される当為の受け入れではない。他方で説得は、当為の受け入れである。「～すべきである」という、内面を規定する力をもつからこそ、説得は暴力以上の強制力なのである²⁵。

対話やエレンコスにおける同意にソクラテスが重要な役割を見出していたことには、おそらく異論はないであろう。しかし、以上まで見てきたように、同意には当為の受け入れという要素がない。ソクラテスが『ソクラテスの弁明』において述べるような、魂に配慮する生を「善いものである」と提示するだけではなく、「魂に配慮する生を生きるべきである」という当為として、対話の相手に受け入れさせようと試みるならば、その点においてソクラテスは、相手を説得しなければならない。これと同様の説得の必要は、『ゴルギアス』においても生じている。「真の弁論術」は、市民たちの魂が善きものになるよう、不正や放埒や悪徳を取り払うために用いられる。このような目的は、市民たちの同意をとりつけるだけでは達成されえない。魂にとっての不正や悪徳が何であるかを示した上で、規律をもち秩序だつことで魂を善きものにすべきだということを市民たちに説得することでそれは初めて達成される。魂を変容させること、プラトンの言葉を用いれば、「魂の向けかえ [periagōgē: περιαγωγή]」²⁶、すなわち内的な規範を外部から変更するためには、説得はどうしても必要なのである。そしてこの説得は、通常、「対話」としての哲学と理解される範囲を越えたところにあると言える。

3.1.2. 説得の2つの種類

説得は、個別の命題に同意してもらうために相手に語ることに主眼をおいているのではなく、諸々の命題から導出される当為を受け入れさせることを真の目的としている。以上で考察してきたように、命題の受け入れと当為の受け入れを区別すると、説得には2つの種類、すなわち、「知識をもたらず説得」と「信念のみをもたらず説得」があるというソクラテスのテーゼに、異なる経路から到達する。

ソクラテスはゴルギアスとの対話で、弁論術とは説得をつくり出すものであるという定義に至ったのち、「弁論術から生ずる説得というのが、いったい、どういう説得のことであり、また、どんな事柄についての説得なのか」についての検討に移る(453A-B)。若干の問答を経てゴルギアスは、弁論術から生ずる説得とは、「法廷やその他のいろいろな集会においてなされる説得であり、また、何についての説得かといえば、正しいことや不正なことについての説得」という結論を下す(454B)。ソクラテスは、ゴルギアスの言わんとすることをさらに深く検討すべきだと述べた上で、「学んでしまっている」とことと「信じてしまっている」とこと、すなわち「学識 [mathēsis: μαθήσις]」と「信念 [pistis: πίστις]」を区別し、これに基づいて、説得は「知識をもたらず説得 [to epistēmēn (parechomenon): τὸ ἐπιστήμην (παρεχόμενον)]」と「知識を伴わない、信念だけをもたらず説得 [to pistin parechomenon aneu tou eidenai: τὸ πίστιν παρεχόμενον ἄνευ τοῦ εἰδέναι]」に分類される(454D-E)。こうした土台作りを終え、ソクラテスはゴルギアスに、あなたが述べたところの弁論術から生じる説得とはどちらなのかと尋ね、当然ながら、ゴルギアスは後者であると答える。

ここでこれらの分類を、先の同意の受け入れと当為の受け入れに照らして考えてみると、当為を受け入れるという説得された状態には、個々の命題に対して、理解をし同意した上で命題からの当為を受け入れている場合と、個別の命題を理解したりそれに同意したりすることなしに当為を受け入れている場合の、2通りがあることに気づく。命題に対する同意は、その命題の理解なしには成立しえない。理解せずに相手の主張を肯定するとすればそれは、疑いを挟まずにその主張を受け入

れるという、まさに信念の働き以外の何ものでもない。それゆえ、命題への同意と、それが必然的に含む理解とは、ソクラテスが「信念」との対比で述べるところの「学識」あるいは「知識」と見なすことができよう。ゴルギアスは「信念だけをもたらず説得」を賞讃し²⁷、ソクラテスはそれを批判する。他方でソクラテスは、もうひとつの説得、すなわち「知識をもたらず説得」を批判することはない。

しかしながら、政治的な場面においては、「信念」をもたらずこと、あるいは信じ込ませせることは、おそらく重要な課題であろう。ソクラテス自身が述べるように、「[法廷やその他の集会にいる：引用者] 群衆に、そのように重大な事柄を〔つまり、正しいことや不正なことを：引用者〕、短時間のうちに教えるなどということは、とうてい、できることではない」(455A)。当然ながら、このような発言の背景には、アテナイ・デモクラシーという制度があるのであって、集会に集まっている群衆こそ、政治的決定を下す当事者であるという文脈がある。彼らに知識をもたらすことが困難であるならば、次善の策として、信念によって説得することになるだろう²⁸。ソクラテスは、「信念のみをもたらず説得」について、無知な大衆の前では有効であるとしても、専門家の前では争えないことを指摘しているが、この指摘はゴルギアスに対する致命的な攻撃とはならない。問題となるのは、大衆に教え込まれる信念が、実際には弁論家が自らの利益になるよう彼らを欺くようなものである場合、それがポリス全体を危機的状況に陥れてしまうことである²⁹。政治的な場面において下される、正や不正の決定は、専門家ではなく大衆に委ねられていることによって、この問題はより深刻なものとなる。

3.2. 多数者に語りかけること

3.2.1. 弁論術の対象としての大衆

正と不正が多数決に基づいて決定されるような状況において力を発揮するのは、アゴラに向向いて、一人一人の生の吟味を行う対話という方法よりむしろ、多くの人びとの魂を一度に動かしてしまうような弁論術である。歴史上のゴルギアスは、アテナイに派遣されて民会で演説した際に、アテナイ市民たちの心を揺さぶり、大きな決断を

させた³⁰。この出来事にプラトンが弁論術のもつ偉大な力を見ていたことは、弁論術を扱う対話篇の対話相手にゴルギアスを選択したことからも、想像に難くない。本節では、弁論術と対話のもうひとつの決定的相違である、それを用いる対象について検討したい。

対話は、ほとんどすべての場合において一対一で行われる。ソクラテスは、魂に配慮するよう民会や劇場で演説を披露するわけではない³¹。彼が行っていたのは、アゴラに出向いて一人一人と対話することであった³²。確かに、プラトンの諸対話篇では、実際に登場人物が2人ということはあまりなく、幾人かの登場人物を対話の相手として、ソクラテスは彼らの主張を吟味し、論駁する。しかしそれでも、吟味している間の相手は1人である。つまり、対話とは文字通り、対峙する人間が一対一で話すことであり、対話における聴き手は1人の人間と言える。そもそも、対話は相互作用を通じて行うものであるから、どちらが聴き手でどちらが話し手かということは問題にならない³³。たとえソクラテスが一方的に語っていると受け取られるような箇所であっても、相手の同意を経ることなしに話が進むことは困難である。これに対して弁論術は、それが披露されている間に相互作用がもたらされるということはまずありえない³⁴。弁論術を用いる人間はまぎれもなく弁論家であり、その人が語りかけるのは聴衆（オーディエンス）である。弁論家は一方的に演説を披露し、聴衆は、拍手や野次で態度表明することはあっても、一方的にその演説を受け取るのみである。

では、聴衆とはどのような人たちによって構成されているのか。『ゴルギアス』における説明を見たところ、ゴルギアスが特徴づける弁論術が、多数の人々を対象としていることが明らかとなる。ゴルギアスが教えると公言しているところの弁論術とは何か、とソクラテスから聞かれたゴルギアスは、次のような説明を加える。

私が言おうとしているのは、言論によって人々を説得することなのだ。つまり、法廷では陪審員たちを、政務審議会ではその議員たちを、民会では民会に出席する人たちを、またその他、およそ市民の集会であるか

ぎりの、あらゆる集会において、人びとを説得することなのだ。(452E)

この箇所では明白なのは、ゴルギアスの述べる弁論術が政治的な集会 [politikos syllogos: πολιτικός σύλλογος] で用いられるということである。そして法廷や集会が、弁論術の用いられる主要な場であることは、他の箇所でもゴルギアスによって繰り返されており³⁵、これは同時代の弁論術の特徴と考えられよう。またそのすぐ後でゴルギアスは、話をする能力のあることを、大衆 [ta plēthē: τὰ πλῆθη] を説得することと並列して述べており、政治的集会で語るとは、大衆に向けて語ることが意味することが分かる。「大衆」はまた、「群衆 [ochlos: ὄχλος]」と互換的に用いられている。

「集会」という言葉、そしてそこに集う人たちを示す「大衆」あるいは「群衆」という言葉は、弁論術がつねに多数者に対して用いられるということの意味している。弁論術がアテナイ・デモクラシーを背景に発展したことを考慮すれば、弁論術が多数者に対して用いられていることは自然のことだと言える。

用いられる対象が、一人ではなく多数者であるという弁論術の性質は、ソクラテスが語る「真の弁論術」においても踏襲されている。ソクラテスは、「迎合の術」とは異なる弁論術を用いる弁論家がいるとすれば、その人は、「最善のことを念頭において、自分たちの言論によって市民たちが最善の人間になるようにという、そのことを狙いながら話をする」(502E)という可能性を語る。さらにまた、迎合としての恥ずべき大衆演説ではない弁論術は、これまで現実に存在した弁論術および弁論家に範型を求めることはできないとしても、次のようなものであるという。すなわち、「市民たちの魂が最善のものとなるようにしてやり、そして聴衆にとっては [tois akouousin: τοῖς ἀκούουσιν]、快いことになろうが、不快なことになろうが、いつでも最善のことを語る」のである(503A)。つまり、真の弁論術が用いられる対象は、市民たち [hoi politai: οἱ πολῖται]、あるいは市民たちの魂 [tōn politōn hai phychai: τῶν πολιτῶν αἱ ψυχαί] であって、一人の市民 [ho politēs: ὁ πολίτης] や市民の魂 [tou politou hē phychē: τοῦ

πολίτου ή ψυχή] ではない。語りかける相手は、聴いている人びと、すなわち聴衆 [hoi akouous: oi ακούους] なのである³⁶。

3.2.2. 大衆の性質

以上までの記述から、ゴルギアスが語り、実践する弁論術と、ソクラテスが主張する「真の弁論術」はともに、多数の人びとを対象としていることが明らかになった。では、多数の人びと、すなわち「大衆」や「群衆」という名で呼ばれる人びとは、どのような性質をもつのだろうか。

ゴルギアスとソクラテスが共通にもっている「群衆」についての認識のひとつは、「無知」である。ソクラテスは、ゴルギアスが、人を弁論の心得のある者になるよう教えることができることを確認しながら、そうであっても説得力ある者になることができるのは、群衆の前で、という条件がつくことを指摘する。ゴルギアスもこの点については同意したところで、ソクラテスは、次のように群衆を特徴づける。

ソクラテス：では、その、群衆の前でということ、一般にものごとを知らない人たちの前で、ということではないですか。というのはむしろ、ものごとの分かっている人たちの前でなら、弁論家のほうが医者よりも、説得力があるはずはないでしょうからね。

ゴルギアス：それは君の言うとおりだ。
(459A)

こうして、ものごとを知らない [ū eidō: ou̐ eĩdō] こと、すなわち「無知」は、群衆がもつ最大の特徴として提示される。ただしここで推測できるのは、こうした群衆のなかには、医者や靴作りの職人のように、専門的な知識をもつ人もいるかもしれない、ということである。それにもかかわらず、「群衆」として、市民たちが大勢集まった場所、弁論家が弁論術を駆使することによって説得に成功するのは、説得が専門的な知識から「はみ出す」ところに関係しているためである³⁷。

『ゴルギアス』においては、群衆について「無知」以上の性格が語られることはないように思わ

れる。しかしながら、後半部のカリクレスとの対話で語られる「真の弁論術」の作用から、ソクラテスが想定する聴衆としての市民は、弁論家の言葉に対する敏感さという特性をもつことを挙げることができよう。既に第2章で見たように、真の弁論術は市民の魂に秩序をもたらしすることができる。市民の魂が放埒な状態から秩序だった状態へと改善されるためには、その市民が弁論家の言葉による影響を受ける前に、ある程度は秩序ある状態を望んでいなければならない。なぜなら、たとえどんなに立派で美しい言葉を並べたとしても、全くそのような気のない人の魂には、その言葉は届かないからである。

自発的に受け入れる気持ちの有無について『ゴルギアス』では明確に示されることはないが、プラトンがそのようなものを構想していたであろうことは、『第七書簡』において明確化されたことから想像できる³⁸。『第七書簡』でプラトンは、病気にかかっている人が健康になろうとする気がある場合にのみ、医者は助言を与えるべきであることを指摘した後、それとの類比で、政治において助言を聞き入れる気になること [ethelō: eθēlō] を語る。プラトンが理想とする真の弁論家は³⁹、ポリスが秩序だっている上でそのポリスを支配する人（たち）が、その体制の変革を望む場合にのみ助言することを許されるのであって、そうでない限り、弁論家は助言を控えなければならない⁴⁰。当然ながら、このような論法にはある種のパラドクスが存在している。ポリスと魂のアナロジーに従えば⁴¹、秩序だったポリスに住まう市民たちの魂は調和が達成されていると考えられる。そして、弁論家が助言することができるのは、既に秩序だった魂をもつ市民たちであるが、そもそも市民たちの魂に秩序をもたらしのは、真の弁論家の役割である。しかし、このようなパラドクスが存在してもなお、市民たちに語ることは、依然として弁論家の役割と見なされるだろう。

4. 結論

本稿では、『ゴルギアス』においてこれまで否定的に捉えられることが多かった弁論術を、「真

の弁論術」に焦点を当て、それがもつ有効な特性を明らかにすることで、プラトンの政治哲学において弁論術が肯定的な役割ももちうる方法でもあることを示した。

弁論術によってもたらされる特徴的な作用とは、対話によって達成することができない2つの仕事、すなわち説得と多数の人に語りかけることにある。個別的命題に対する同意に基づく対話は、諸命題から導出される当為の受け入れを必然的には可能にしない。それゆえ、当為を受け入れさせること、魂という内面を変容させることは説得によって可能となる。また、対話が一對一という形式をほとんどつねに保持する一方で、弁論術は政治的決定の場である集会において、多数の人の魂に同時に作用することを得意とする。このような、弁論術それ自体がもつ特徴は、ゴルギアスやポロスやカリクレスが標榜する欺瞞的な弁論術であれ、ソクラテスによって「真の弁論術」と呼ばれる弁論術であれ、消えることはない。プラトンが弁論術全般を否定せず、それどころか、批判と積極的評価という、相反する態度を向けることになった理由は、まさにこのような弁論術がもつ有効な性質にある。

以上のように本稿では、弁論術がもつ有効性を非常に積極的な形で論じてきた。言い換えるならば、弁論術の光の部分のみを論じてきた。しかしながら、ソクラテスが「真の弁論術」以外の弁論術に対して辛辣な批判を加えることから明らかのように、弁論術には影の部分も存在する。この影の部分こそ、弁論術に関する否定的解釈の基礎であり、この部分がもつ力を強調するために、ゴルギアスやポロスが提示する弁論術は、最善を無視して快楽を目指し、無知な人びとを欺くと言われるのである(464D)。通常、ソクラテスによる弁論術批判は、最善についての知識の有無をひとつの基準とする「技術」の観点から考察されることが多い。しかしながら、本稿で論じたように、プラトンが知識の有無を越えたところに弁論術の有効性を見ていたのであれば、「技術」の基準によってのみ弁論術批判を考察することは不適切となろう。プラトンが弁論術において最大の危険な要素として見出していた影の部分とは、欺きや欺瞞と呼ばれるものであると考えられるが、この点に関しては稿を改めて論じることとしたい。言論

と、それを操る弁論術は、人びとの魂を善きものにもできれば、邪悪な道へと引きずり込むこともできる。そしてこの2つの力をもつ言論のみが、アリストテレスが述べるように⁴²、人びとの間に規範を構築し、政治を可能にするがゆえに、プラトンが見出した弁論術の光と影は、政治哲学において重要な意味をもつのである。

[注]

- 1 政治と哲学の接点については、朴『魂の正義』を参照。「対他的な正義の問題は、〈他者〉に生き方や行動の変更を要求するという事態を、不可避免的にひき起こすのである。ここにおいて倫理は共同体における政治と接点をもつ」(朴『魂の正義』, 177頁)。
- 2 実際に民会で発言できる市民は限られており、アテナイ市民のうちで民会に参加していたのは人口の8分の1程度であったと言われている(アリストテレス『政治学』1319a, フィンリー『民主主義』, 46頁)。
- 3 ソフィストと弁論家の区別は、ソフィストが一般的に、すぐれた人間あるいはポリスの一員となるための徳を授ける一方で、弁論家は、特に政治的な集会における言論の技術を授けるということにあったが、結局のところ、ポリスの一員としてすぐれた人になるというのは、弁論術の習得を意味することがほとんどであった(田中『ソフィスト』112頁)。
- 4 藤澤『藤澤令夫著作集 第IV巻』27頁参照。
- 5 プラトン『ゴルギアス』からの引用箇所は、本文中で括弧内に、ステファヌス版の頁数とアルファベットを記している。プラトンの他の対話篇からの引用は、対話篇名の後に同様の仕方で示している。邦訳は岩波書店の『プラトン全集』を参照しているが、必要に応じて訳語を変更した。
- 6 ゴルギアス「わたしは、これまでに何度も、わたしの兄弟(のヘロディオス)や、その他の医者たちと一緒に、彼らの患者のところへ行ったことがある。それは患者たちのなかでも、薬をのもうとしなかったり、あるいは、医者に身をまかせて切ったり焼いたりされるのをきき入れないでいる病人だったのだが、その病人を、当の医者は説得できないでいるので、わたしが代って説得してやったのだ。ほかでもなく、弁論術を用いてだよ。」(456B)
- 7 『ゴルギアス』において見出される技術の基準は、次の3点に要約することができる(465A参照)。(1)「技術」は、対象にとってそのときどきに最も快いことではなく、最善ということに考慮を払わなければならない。(2)「技術」は、自らが対象に提供するものが、本来どのような性質のものであるかについて、理論的な知識をもたなければならない。(3)「技術」は、対象に自らを提供する際、提供する理由を述べるべきでなければならない。

ならない。これらの基準を満たさないために、弁論術は「技術」の名に値しない「経験や熟練」なのである。

8 技術に着目した主要な研究として、Rooschnik, *Of Art and Wisdom* が挙げられる。特に、弁論術にかんしては chapter 3 を参照のこと。

9 カリクレス「その質問には、もはや単純に、どちらだとは答えられないよ。なぜなら、話をするのにも、市民たちのためを思って話をする人たちもあるし、他方には、あなたの言うような、そういう連中もあることだから。」(503A)

10 中期対話篇である『パイドロス』では、多くの論者が認めるように、弁論術に対して積極的な役割が付与されている (Hackforth, *Plato's Phaedrus*; Rowe, *Plato: Phaedrus*; McCoy, *Plato on the Rhetoric of Philosophers and Sophists* を参照)。たとえば、『パイドロス』でのソクラテスは、「言論の技術」は哲学的な対話の行程であるところのディアレクティケーのみでは不十分であって、それには弁論術的な要素が必要であるということを明白に述べている。すなわち、弁論術的な「たすけがなければ、ものごとが真実どうあるかを知っている者といえども、技術にかなった仕方では説得するということでは決してできないだろう」というのである (『パイドロス』260D)。ディアレクティケーにおいて欠如している、言論の技術の作用が、すなわち、説得であることは、『パイドロス』からは明らかである。しかしながら、本稿においては、あえて『パイドロス』を考察対象としない。その理由は、『パイドロス』においては比較的に単純に、「言論の技術」においてディアレクティケーと弁論術が結びついており、それらの間にある差異、そしてその背後に存する政治と哲学の間でのプラトンの葛藤は、あまり浮かび上がってこないように思われるためである。

11 加来彰俊「ゴルギアス篇におけるプラトンの意図」28頁。

12 502E-504E, 517A 参照。この箇所は『ゴルギアス』における弁論術に対する肯定的見解を示す論者にとっての論拠となっている (たとえば, Kennedy, *The Art of Persuasion*, p. 16)。

13 これは弁論術が、魂を対象とする政治術のうちのひとつの部分である司法術の影の部分であるという、前半部のソクラテスの発言に対応している (464B-465C)。

14 木下「弁論術はなぜ技術ではないのか」29頁。

15 例えば Yunis, *Taming Democracy*, pp. 157-161。ただし Yunis は, "Plato's Rhetoric" においては迎合的な弁論術と異なる真の弁論術の存在を認め、プラトン政治理論の本質的部分と見ている (Yunis, "Plato's Rhetoric," pp. 78-79)。他方で McCoy は Yunis と異なり、ソクラテスの批判的吟味 [critical questioning] が、もうひとつの弁論術、すなわち真の弁論術であると考え、ソクラテスの哲学的対話の実践と弁論術の共通性を挙げることで、両者を容易に結びつけている (McCoy, *Plato on the*

Rhetoric of Philosophers and Sophists, pp. 108-110)。しかし、このような形で弁論術に肯定的評価を下すことは、両者の相違を曖昧にし、むしろ弁論術を哲学的対話へと回収してしまうことになる。このような見方は、たとえ肯定的に捉えているとしても、正義についての真の知識をもった弁論術は、「弁論術」と呼ばれるのではなく、司法術・正義の技術であるという、否定的見解と同じ結論に、異なる側面から光を当てているに過ぎない。

16 ソクラテス「ほくは、どんな話をするにしても、それについての証人を、一人だけは立てることができるからだ。つまりその証人とは、ほくの話相手となっている当のその人のことだ。そして多くの人たちには目もくれないというわけだ。つまりほくは、一人の人の票を得ることは知っているが、多くの人たちとは話し合うこともしないのだ。」(474A-B)

17 Yunis, *Taming Democracy*, p. 160。

18 ソクラテスの説得の失敗に関しては McCoy も触れている (McCoy, *Plato on the Rhetoric of Philosophers and Sophists*, p. 97; pp. 100-101 参照)。

19 佐々木毅『プラトンと政治』(東京大学出版会, 1984年), 113-116 頁参照。佐々木は刑罰という側面に着目しながら、ソクラテスが哲学的使命の実現を私的交際による実現を試みる一方で、プラトンは哲学と政治術を結合し、政治制度の再解釈を目指しているとして、両者の相違を描いている。特に、哲学の政治化という問題は、ボバーが批判したようなプラトンのソクラテスに対する裏切りではなく、「ソクラテスに対するプラトンの積極的批判」である。筆者は、佐々木によるこのようなソクラテスとプラトンの相違を大枠で支持する。

20 佐々木, 同書, 116 頁。

21 ヴラストスはソクラテスのエレンコス、次のように定義している。「ソクラテスのエレンコスとは、倫理的真理の探求であり、それを否定的・反対的議論によって行うものである。ここで反駁の対象となる立言は答え手自身の意見でなければならない、その立言の論駁は、その立言の否定が彼自身の意見どもから導出されたときに、またそのときにのみ、なされたものとされる」(ヴラストス「ソクラテスの論駁法」40頁)。

22 本稿では、プラトンが意図する「対話」を非常に広義に捉えている。プラトンの哲学における「対話」の概念には、ここで触れたソクラテスのエレンコスの他に、哲学的問答法、あるいはディアレクティケー (『国家』532B-534E; 537C-D, 『パイドロス』265D-266D; 269B; 276E), そして対話篇という構造の、主に3つの主要なテーマがかかわっていると考えられるが、これらの詳細な考察は、本稿では控えることにする。

23 たとえば木戸川は、「ソクラテスがエレンコスを用いて目指す説得は後者の説得〔知識を与える説得: 引用者〕である。ソクラテス是对話相手を単に説得することではなく、議論の内て真理を明らかにし、対話相手に知識を与えることを目指している」(39頁), あるいは、

「説得することは、特定の命題に同意させる（あるいは同意を撤回させる）ということであり、相手の同意を得ることとの関係は明らかである」（41 頁）と述べて、説得とエレンコスの間の差異を認めていない。木戸川「エレンコスにおける同意と真理」参照。

24 註5参照。

25 『ビレボス』では、主要な対話者であるプロタルコスが、ゴルギアスに言及しながら次のように述べる。「わたしは、ソクラテス、いつも度々ゴルギアスから聞かされましたよ、説得の技術があらゆる技術にくらべて、ずっとすぐれたものだというを。なぜなら、それはあらゆるものを暴力によって強制するのではなくて、相手の自発性によって、自己の下に隷属させるから、したがって、あらゆる技術のうちで断然一番すぐれているのです」（『ビレボス』58A-B）。

26 『国家』518C。

27 たとえば459C。ゴルギアス「弁論術というものは、大変便利なものだということになるのではないかね、ソクラテス、ほかのいろいろな技術を学ばなくても、ただこのひとつの技術を学んでおくだけで、専門家たちに少しもひけをとらないというのであれば。」

28 理解するという知識を伴わずに信念へと導く方法は、ソクラテスが道徳的な基礎づけをする際にミュートス（神話・物語）に訴えかける手段と重なり合う部分が多いように思われる。特に『国家』において語られる、三種類の人間（『国家』414C-415D）や、死後の世界を覗いたエルの物語（『国家』614A-621D）は、「高貴なる嘘」（『国家』389B-C）との関連で重要な意味を帯びているだろう。『ゴルギアス』においてもまた、対話篇はソクラテスが一人で語る幸福の島のミュートス（523A-527E）で締めくくられている。

29 多くの場合、ソクラテスが「技術」と呼ぶにふさわしいと考える技術の対極に位置するのは「迎合の術」であるが、それを成り立たせる要素は最善を無視し快楽を目指すことであるとして議論される（たとえば、Roochnik, *Of Art and Wisdom*）。しかしながら、464Dにおけるソクラテスの発言からは、もうひとつの要素、すなわち無知な人びとを欺くことがあることが明らかである。これら2つの要素を同一視する、あるいは前者の要素に後者の要素を還元してしまうのは困難であると考えられる。なぜなら、欺きが、少なくとも、ある人に対して本来向かうべき方向とは異なる方向へと向かわせ、陥れることを意味するならば、欺くためには、ソクラテスが要求するほどの厳密な真実の知識や最善ではないとしても、欺きの反対側にある真実や、本来向かうべき方向を欺く主体が知っていなければならないことになる。したがって、欺きや欺瞞（*apate*: *ἀπάτη*）は、プラトンが最も危惧した、弁論術のもつ力のひとつであると考えられる。

30 シュラクサイからの攻撃を受けたレオンティノイの人々は、同盟軍であるアテナイに軍事的援助を依頼すべく、前427年にゴルギアスを外交使節の主席代表として

アテナイへ派遣したと伝えられている。その際の彼の雄弁ぶりにアテナイ人たちは魅了され、援助の派遣に同意したという。トゥキディデスはこの出来事を、「レオンティノイ側同盟諸邦はアテナイへ使節を送り、〔中略〕自分たちの救援に船隊を送るようにアテナイ人を説得した」と記述している（『戦史』第3巻86）。またプラトンも、「民会で素晴らしい演説をしたと評判」と語らせている（『ヒippias（大）』282B）。歴史上の人物としてのゴルギアスについては、Gorgias, *Encomium of Helen*, pp. 9-19を参照。

31 ソクラテスは、自らが法廷に連れ出された際にも弁論術を用いる準備はないということを、『ソクラテスの弁明』の最初の箇所ですべて述べている。「私はもう70歳以上にもなるが、法廷に出たのはこのたびがそもそも最初である。したがって私はここで慣用の言葉遣いには全然通じていない」（『ソクラテスの弁明』17D）。

32 たとえばこれは、「歩き回って、この国の人々のうちにせよ他国の人々のうちにせよ、誰か知者であると思う人があれば、その人を調べている」というソクラテスの発言から明らかである（『ソクラテスの弁明』23B）。

33 ここで相互作用というのは、対話の主導者であるソクラテスに対して、何らかの主張をすることで、対話の流れを異なる方向へと導く役割が、ソクラテスの対話相手には与えられている、ということである。たとえばポロスは、ゴルギアスを矛盾に陥らせたソクラテスを非難するが、そのポロスの非難に対してソクラテスは次のように述べている。「ああ、これは見上げたものだよ、ポロス。いや、ほんとうに、君、われわれは仲間や息子たちをむだに持っているわけではないのだ。」（Grg. 461C）

34 Oberは、演説をすることと、それに対して聴衆が拍手や野次で態度を表明することとの関係を相互的なものと見ているが、弁論家が語り方を変更することはあっても、聴衆の拍手や野次によって弁論家の考え方が変容することはないであろう。Ober, *Mass and Elite in Democratic Athens*, pp.104-105 参照。

35 たとえば次の箇所です示される。ゴルギアス「わたしの言うのは、こういう説得なのだ。つまり、さっきも言っていたように、法廷やその他のいろいろな集会において〔*ἐν τοῖς δικαστηρίοις καὶ ἐν τοῖς ἄλλοις ὄχλοις*〕なされる説得であり、また、何についての説得かといえば、正しいことや不正なことについての説得なのだ。」（Grg. 454B）

36 このようなソクラテスの言葉に加えて、『ゴルギアス』での対話が行われている状況からもまた、多数のものに語りかけることの必要が示唆されていると考えられる。全篇を通じて言葉を発する人物としては、ソクラテス、ゴルギアス、ポロス、カリクレス、カイレボンの5人しか登場することはないが、この場面には、対話に自発的に加わることのない聴衆がいる。その存在は、次のようなゴルギアスとカイレボンの言葉から知ることができる。

ゴルギアス：だがしかし、おそらく、ここにいる人

たち [to tōn parontōn: tò tōn parōntōn] のことをも
 考えに入れておくべきだったのだろうね。というの
 は、実をいうと、君たちがここへやって来るより
 もずっと前から、わたしはここにいる人たちに対し
 て、たくさんのお話をしてみせていたのだ。(中略)
 カイレボン：ゴルギアスにソクラテスさん、ま
 あ、ご自分で直接、この人たちの [tōn adorōn
 boulomenon: tōn andrōn boulōménon] ざわめきを聞い
 てごらんさないよ。あなた方が何かを話して下さる
 なら、それを聞きたいと、この人たちは望んでいる
 のですからね。(458B-C)

聴衆がいる前で対話が繰り返されるのは、『ゴルギア
 ス』に特殊なことではなく、ソフィストによる市民の教
 育について議論がなされる『プロタゴラス』もまた、同
 様の状況である。多数の人を対象とする技術、すなわち
 『ゴルギアス』においては弁論術、『プロタゴラス』にお
 いては徳の教育が議論される際に、聴衆の前で対話が実
 践されていることに、プラトンにおける多数者の前で語
 ることの重要性を読み取ることができるのではないだろ
 うか。

- 37 朴は、弁論術の弱点が群衆の間でしか成功をおさめる
 ことができないというソクラテスの批判は的外れであっ
 て、説得がそこで成功すればそれ自体意義をもつもので
 あることを指摘している(朴『魂の正義』, 184-185頁)。
- 38 Yunis は、『第七書簡』と『国家』における受容者
 [recipients] について、筆者と同様の主張をするが、『ゴ
 ルギアス』で明確に示されていないことから、『ゴ
 ルギアス』においては多数者とのコミュニケーション
 の可能性は退けられていると見る(Yunis, *Taming
 Democracy*, p. 161)。
- 39 ただし、『第七書簡』で述べられる際には、「真の弁論
 家」という言葉は用いられていない。助言を与えるのが
 いかなる人物であるのかに関しては議論の余地がある
 が、ここではポリスの進むべき方向を定めるという意味
 において、この箇所ですべて述べられている助言者を「真の弁
 論家」として解釈する。
- 40 プラトンによれば、ポリスにおいては正しい体制のも
 とで助言を求められた場合に助言をし、そうでない場合
 には助言を与えない人が「男たる andra: ἄνδρα」人であ
 る(『第七書簡』330D-E)。
- 41 『国家』368C-369A で導入されるポリスと魂のアナロ
 ジーは、『国家』を通底するひとつのテーゼである。
- 42 「言葉 [logos: λόγος] は有利なものや有害なもの、
 従ってまた正しいものや不正なもの [to dikaion kai to
 adikōn: τὸ δίκαιον καὶ τὸ ἄδίκον] をも明らかにするために
 存するのである。なぜならこのことが、すなわち唯一
 善悪正邪 [agathou kai kakou kai dikaiou kai adikou: ἀγαθοῦ
 καὶ κακοῦ καὶ δίκαιου καὶ ἀδίκου]、そしてその他について
 知覚をもつということが、他の動物に比べて人間に固
 有なことだからである。そして家やポリス [oikian kai
 polin: οἰκίαν καὶ πόλιν] を作ることができるのは、この善

悪等々の知覚を共通に有していることによってである」
 (アリストテレス『政治学』1253a14-19)。

【参考文献】

- Plato. *Platonis Opera*. Edited by John Burnet. Oxford:
 Oxford University Press, 1900-1903.
- Plato. *Gorgias*. with introduction and commentary by E. R.
 Dodds. Clarendon Press, 1990.
- Plato. *Gorgias, Menexenus, Protagoras*. Edited by Malcolm
 Schofield, translated by Tom Griffith. Cambridge
 University Press, 2010.
- 田中美知太郎、藤沢令夫編『プラトン全集』岩波書店、
 1974-1978年。
- Aristotle. *Aristotle's Politica*. Edited by William David
 Ross. Clarendon Press, 1957.
- Gorgias. *Encomium of Helen*. Edited with introduction,
 notes and translation by D. M. MacDowell. Bristol
 Classical Press, 1982.
- Hackforth, R. *Plato's Phaedrus*. Translation with introduc-
 tion and commentary. Cambridge: Cambridge Univer-
 sity Press, 1952.
- Kennedy, G. *The Art of Persuasion*. Princeton University
 Press, 1963.
- McCoy, Marina. *Plato on the Rhetoric of Philosophers and
 Sophists*. Cambridge: Cambridge University Press,
 2008.
- Ober, Josiah. *Mass and Elite in Democratic Athens:
 Rhetoric, Ideology, and the Power of the People*.
 Princeton University Press, 1986.
- Roochnik, David. *Of Art and Wisdom*. Pennsylvania: The
 Pennsylvania State University Press, 1996.
- Rowe, Christopher. J. 1986. *Plato: Phaedrus*. Translation
 with introduction and notes. Warminster: Aris and
 Phillips.
- Yunis, Harvey. *Taming Democracy*. Ithaca and London:
 Cornell University Press, 1996.
- . "Plato's Rhetoric" in *A Companion to Greek Rhetoric*.
 Edited by Ian Worthington. Blackwell Publishing,
 2010.
- アリストテレス(山本光雄訳)『政治学』岩波書店、1961
 年。
- ヴラストス、グレゴリー「ソクラテスの論駁法」井上忠、
 山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線(1)』東京大学出
 版会、1986年。
- 加来彰俊「ゴルギアス篇におけるプラトンの意図」『西洋
 古典学研究(8)』1960年。
- 木戸川啓多「エレンコスにおける同意と真理—「ゴル
 ギアス」における誠実さについて」『古代哲学研究
 (XXXIII)』2001年。

須賀麻衣：説得のための弁論術

木下昌巳「弁論術はなぜ技術ではないのか？—プラトン『ゴルギアス』における弁論術の技術性—」『ヒュポテシス (8)』1998 年.
佐々木毅『プラトンと政治』東京大学出版会, 1984 年.
田中美知太郎『ソフィスト』講談社, 1976 年.
トゥーキュディデース (久保正彰訳)『戦史』岩波書店, 1966-1967 年.

朴一功『魂の正義——プラトン倫理学の視座』京都大学学術出版会, 2010 年.
フィンリー, モーゼス (柴田平三郎訳)『民主主義：古代と現代』講談社, 2007 年.
藤澤令夫『藤澤令夫著作集 第 IV 巻：プラトン『パイドロス』註解』岩波書店, 2001 年.

須賀 麻衣 (すが まい)

所 属 早稲田大学政治学研究科博士後期課程

研究分野 政治思想史, 政治哲学

所属学会 日本政治学会, 政治思想学会, 政治経済学会, ギリシャ哲学セミナー